慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三尾裕子編『台湾における〈日本〉認識：宗主国位相の発現・転回・再検証』(風響社, 2020年)
Sub Title	
Author	益田, 喜和子(Masuda, Kiwako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2021
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.91 (2021.) ,p.(73)- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：三尾裕子編
『台湾における〈日本〉認識　宗主国位相の発現・転回・再検証』
（風響社，2020年）

益　田　　喜　和　子*
Kiwako Masuda

本書は2006年刊行の『アジア・アフリカ言語文化研究』71号の特集「台湾における日本認識」を単行本化したものである。特集号に収録された各論文は，2004年に行われた国際ワークショップでの発表論文がもととなっている。ほかにも『戦後台湾における〈日本〉』（2006年），『台湾における〈植民地〉経験』（2011年）が出版されており，本書を含めたこれら3冊は一つのシリーズを成す。

総論としての「特集『台湾における日本認識』序」と7つの論文は十数年前に書かれたものであるため，各論文が示す内容と現代台湾の日本認識には相違する点もある。三尾裕子は「新序」において，本書が表す「当時の歴史認識」は一つの「現在」でもあり，時の流れに応じて歴史化されていくものであると説明している。その意味で，「当時という『現在』の歴史認識を記録にとどめる」本書は先の2冊とともに，台湾における「植民地経験」の語りや，台湾研究の動向と行く末を考える上で重要な一冊である。

「特集『台湾における日本認識』序」で三尾は，植民地主義研究の課題と台湾研究が直面する困難を指摘した上で，本書の理論的指針を総括している。台湾民主化以前は，強圧的な政治のため台湾を固有の地域として研究することが困難であったが，1990年代からは中国とは異なる脈略から台湾を分析する学術研究の流れがおこった。民主化に向け，台湾に埋め込まれた物質的及び精神的な「日本」の痕跡が次第に語られるなかで，台湾の「植民地経験」に対する認識の研究は未だ少なく，特に漢人研究においてその欠落が大きいことを三尾は指摘する。こうした背景から，本書では台湾の人々が「日本」をどのように認識してきたのかが考察されている。

上水流久彦は「台湾の歴史の語り方」と題する論考において，台湾の歴史を捉える上で，1945年8月15日を重要な節目として特権化することの自明性を問題化している。上水流は，2002年の台北市における聞き取り調査をもとに自らの民族誌を批判的に検討することで，1945年に対する台湾の人々の認識が学歴によって異なること，一方の1947年に起こった二・二八事件は学歴に関係なく，日常生活を変えた出来事として多くの人々に認識されていること，そして同一人物のなかに2つの異なる歴史区分

*　慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程1年

が併存することがあることを明らかにした。1945 年 8 月 15 日を絶対的区分とする歴史認識は，必ずしも台湾の人々の過去の捉え方と一致するものではない。上水流は，日本側の視点から特定の時間的区切りを特権化し，台湾社会を記述することは，植民地教育を受けた人々の多様性の軽視とその植民地経験の均質化につながること，また 1945 年や 8 月 15 日を特別な節目として正当化する背景にみられる政治的問題を見落とすことになると指摘している。人々の歴史認識を記述する作業において上水流が求めるのは，特定の区分を特権化することの理由と社会・経済・政治的状況の分析を含めた記述である。人類学者の支配的な語りに収斂されない，人々の記憶に基づいた過去の記述が，ある歴史の語りの客観性や中立性を疑う上で有意義であるからこそ，上水流は当該地域の人々の記憶を「日本人」の視点から無意識に語ることの危うさに目を向けさせる。上水流の論文では，台湾の人々の歴史認識について，光復後の日本語の使用とその規制にのみ焦点が当てられていたため，台湾に残された言語以外の「日本」的要素が人々の歴史認識にどう影響していたのかについても検討する余地があるが，植民地主義のまなざしとその暴力性に加担しうる歴史記述のあり方を台湾と日本の関係において指摘した本論文は，意義深いものとなっている。

「台湾東部における漁撈技術と『日本』」で西村一之が調査対象にしているのは，台東県 S 地区のカジキ突棒漁を主とする漢人やアミを含んだ台湾漁民である。S 地区では日本植民地期における総督府の漁業開発として 1932 年から日本人漁民の移住計画が進められ，カジキ突棒漁が導入された。その後，「移民村」と呼ばれた S 地区の日本人漁民は，戦後に日本人の引揚げが実施された後も留用の対象である専門家として台湾にしばらく留まり，人々に漁業を伝えていた。この時期に S 地区の台湾漁民は，日本人漁民の技術や漁撈知識を習得し，1950 年代から 1980 年代のカジキ突棒漁最盛期を担った。日本人漁民の知識は，船長としての資質や漁撈の成功にも結びつけられ，最盛期において船長の地位を獲得する上で重視された。西村は，日本人漁民の影響を受けた S 地区の歴史状況や個々人の直接的/間接的な「日本」との関係，それに基づく共通経験といった事象が，台湾人漁民の内にイメージ化された「日本」を形成し，「船長の力」を裏打ちする要素として働いていたとする。しかし，その後の政府による漁船の個人所有化や漁労の機械化，就労人口の減少といった背景から，船長の地位を獲得する過程が変化し，「船長の力」を確証していたイメージ化された「日本」は現在，かつてのカジキ突棒漁の隆盛を表現する〈懐旧〉の意味合いが強い存在に変化したと西村は結論づける。

「佛光山からみる，台湾仏教と日本との関係」で五十嵐真子は，1967 年に星雲大師よって開かれた高雄県大樹区の臨済宗の仏教寺院，佛光山について，日本仏教と中国仏教の諸要素を取り入れながら台湾仏教として発展したその経緯に注目する。佛光山の発端は，1950 年代の星雲による宜蘭の雷音寺を根拠地とする活動である。1844 年の建立当時，雷音寺は在家者が菜食や念仏会を行う独特の仏教形態の体を成す民俗宗教施設，斎堂であった。しかし，日本植民地期である 1936 年頃に台湾の在来宗教弾圧運動が起き，雷音寺を含む多くの斎堂は存続のため日本仏教を色濃く反映したものへと改変を余儀なくされた。さらに 1950 年代は外省人勢力がこれを再編し，中国仏教への指向性を強めていく。この「中国化」の過程で外省人である星雲は，日本仏教の教育を受けた台湾人出家者たちと協力し，教育に重点を置いた活動を広げ，佛光山を開山し，台湾仏教の基礎を形成した。五十嵐によれば，佛光山の特色である日本仏教をモデルとする組織力と多角経営方針は，明治時代に日本仏教が目指した仏教の近代化や合理化と連動している。これを通じ，五十嵐は佛光山の成長課程に近代的組織や教育事業としての仏教施設の形成という日本仏教の残滓が限定的に取り込まれていたことを明らかにする。ひとつ，本書の主題

と関係して気になったのは，佛光山における僧侶や関係者たちが実際に「日本」や「日本仏教」に対してどのような認識をもっているのかという点である。佛光山の端緒となった活動段階において，日本仏教の教育を半ば受けた星雲の協力者・妙慧法師が，自身の宗教的出自に劣等感を抱いていたことが示されている。こうした背景を含みながら，その後佛光山で積極的な日本仏教との交流が展開されるなか，それに参与する人々の日本認識はいかなるものであるのだろうか。いずれにおいても，これまで中国国民党との関係から一面的に説明される傾向にあった佛光山の成長について，日本仏教の残滓を吸収しながら台湾仏教として独自に確立した，その発展の多面性を描いた本論文は，佛光山に限らず戦後台湾の来し方行く末を知る上で重要である。

松金公正の「真宗大谷派による台湾布教の変遷」では，日本仏教の一宗派である浄土真宗，特に真宗大谷派が分析の対象とされている。松金は，日本仏教各宗派の台湾における布教活動が植民地支配との関係から「皇民化」の一端を成したと説明されてきた点について，各宗派の布教活動が実際にそれほどの役割を果たし得ていたのかと疑問を投げかけ，台湾植民地統治機構と日本仏教勢力の関連性を明らかにすることの重要性を説く。また，従来の日本仏教各宗派のアジア布教に関する研究が，布教者たちの苦難や努力に焦点を当て，それを顕彰するもの，もしくは現代の視点から教団の戦争責任を断罪するものといった，二極化した立場に偏る傾向があると松金は指摘する。こうした背景から，松金は日本に残された宗門の機関誌と台湾の行政文書の分析を通じて，大谷派の台湾布教開始当初から台北別院の成立，そして本堂の建立までの期間に着目し，その展開の特色を考察している。まず，寺院の設置数や信者数の変遷を通して松金は，台湾における大谷派の布教が始まった頃は，本島人布教に力点がおかれていたが，大正期以降は布教の対象が内地人へと移行していることを明らかにする。また台北別院成立までの時期に関しては，その特色に従って5つの時期を設定し，その経緯を詳らかにしている。その上で松金は，大谷派の台湾における植民地布教への取り組みに対する態度が消極的で「慎重な」ものであったことを指摘し，大谷派の中国や朝鮮での布教や，先行研究との相違を明らかにしている。

「植民地下の『グレーゾーン』における『異質化の語り』の可能性」において三尾裕子は，1941年から1945年に発行された半学術的雑誌，『民俗台湾』とそれをめぐる1990年代後半の議論を再検討し，植民地主義と人類学の関係をめぐる問題のなかでも，特に支配者側にたった研究者に焦点を当て，その多様な解釈やスタンスのあり方を提示している。日本人研究者である金関丈夫が筆頭となり，『民俗台湾』には台湾漢人の民俗に関する研究論文や記事が掲載された。戦時期に皇民化が叫ばれるなか，『民俗台湾』はその必要性を形式的に認めながら，台湾の民俗を記録・保存することの意義を唱え，好評価を得ていた。しかし，1990年代後半に日本植民地期の人類学・民俗学批判として，川村湊や小熊英二などから『民俗台湾』の植民地支配への貢献が指摘され，評価は一変する。三尾は一連の議論において，『民俗台湾』批判への反論がほぼ行われていないことから，①「皇民化への関与」，②「『皇民化』と『文明化』の矛盾」，③「金関丈夫と楊雲萍」，④「人類学とレイシズム，優生思想」という4点を再検討する。これにより，①『民俗台湾』が皇民化とは逆に漢人の「戦時下の民族運動のはけ口」ともなっていたこと，②金関らが合理的な「皇民化」を部分的に許容し，雑誌の正当性を保持しながら不合理な「日本化」を押しとどめ，台湾の民俗を守ろうとしたこと，③楊が金関の台湾民俗への「冷たさ」を感じた背景，④金関が台湾漢人を差別の対象とみていた確証がないことなどが，明らかにされている。三尾は，植民地主義性の代表として批判された金関が自らの権力性に無自覚であった点は否めないとしながらも，一方で，そうした権力性を台湾の民俗や民族的尊厳の維持に向けようとした努力を認める。『民

俗台湾』の参加者たちが，「植民地政策への貢献」と「『民俗』を武器にした抵抗」という 2 つのベクトルを一絡げにした「グレーゾーン」に自らの意図を紛れ込ませていたことから，三尾はステレオタイプ化された「植民地主義と共犯関係に有る民俗学者・人類学者」という植民地主義批判に対する，「異質化された語りの可能性」を提示している。

林美容の「宗主国の人間による植民地の風俗記録」では，1903 年に日本で出版された佐倉孫三の著作『臺風雑記』が分析の対象となっている。植民の目的のために記された同書は，日本植民地期における最初の台湾風俗に関する記録であり，日本の風俗も参照されている。他の風俗記録とは異なり『臺風雑記』には漢文が用いられていることから，林は日本人だけでなく台湾人にもこれを見せる意図を看取している。『臺風雑記』の分析を通じて林は，現在の台湾の人々に必要とされる態度は，植民地化の経験をただ悲観的に捉えるのではなく，過去の植民地の歴史や現在のポストコロニアリズムの状況に正面から向き合い，台湾の将来を展望することにあるという。本論文では，台湾人である筆者が『臺風雑記』を読み，何を思ったのかが示されている。『臺風雑記』が日本人の視点からみた台湾の風俗を記録しているだけでなく，台湾の人々もまた，そこに対照的に記された日本の風俗の記録をもって，日本をみているということである。

「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」で黄智慧は，戦後台湾で出版された「日本文化論」に関する著作をもとに，台湾特有の対日観について検討している。黄は，分析対象を台湾出身の著者による単行本に限定し，それらを以下の 4 種類に分類した: ①広汎な「文化論」，②自伝／伝記／詩集，③日台関係を主軸とする「文化論」，④流行文化論。①の文献の特徴は，「侵略される側の日本観」と「植民される側の日本観」が共存している点であり，黄はこれを「侵略される側」（外省人）が「植民される側」（本省人）を一方的に代弁・代行しているものと説明する。②の文献は，1990 年代以降に日本語で記された著作が多く，その執筆者の平均年齢は 80 歳以上であり，一途に自分史を語るものである。③の文献では，日台関係の現在と未来に重点がおかれ，植民地経験の視点から台湾，中国，日本の文化集団の違いや区別が提示される。黄はこれを，植民される側として植民主の脆弱さを指摘しながら，その更なる発展のあり方に寄与するものとする。日本文化への親近度を示す④の文献では，1990 年代以降の日本流行文化が扱われる。テーマは，日本の流行文化を好む台湾の若年層による「哈日現象」と日本の中高年層のエロスに関するものである。黄は，日本流行文化論が植民地経験とは別の文脈から生まれたものであり，こうした過去と訣別する姿勢も脱植民地化のプロセスにおいて必要となる可能性を提示している。

本書に収録された各論文の概要は以上の通りである。振り返ると，各論文で取り上げられた日本認識は，当たり前ではあるがその調査地や着眼点によって多様であった。あまりに多様であるが故に，その全貌を捉えづらいともいえる。しかしこれは，一言で台湾における日本認識といっても，それを特徴づけることが難しく，それぞれの文脈や局面のなかに異なった「日本」の痕跡を認めることができるからでもある。その意味で，本書で示された多様な日本認識のあり方は，台湾がおかれていた歴史政治的状況の複雑さや重層性を物語っていた。

現代台湾において日本植民地期を生きた人々の話を直接に聞いたことがない若者は少なくない。黄の論文にあるように，従来と全く異なる文脈から新たな日本認識が台湾で生まれることもある。今や「日本」に懐旧の念を抱く者はわずかであり，国際社会における台湾の立場との関係から語られることの方が多い。だがこうした状況が単純に植民地経験から台湾の日本認識を語ることの意義を損なうとは限ら

ない。最近では，日本植民地期の修学旅行を再現した書籍が台湾で出版されるなど，当時を直接経験していない世代の人々が，歴史資料や祖父母世代の語りをもとに，それを再構成するような取り組みも一部でみられる（蔡 2020）。植民地経験の語りや日本植民地期における学術研究の成果を，現代台湾の人々がどのようなかたちで再解釈，利活用していくのかといった点は，植民地主義研究の課題としても検討に値するだろう。

また世代だけでなく，人々が台湾社会のどこに位置付けられているのかによってもその日本認識は大きく異なる。本書では西村論文で台湾原住民アミについて触れられていたが，主としては多数派である漢族系台湾人に焦点が当てられていた。植民地期から常に社会の最下層に位置付けられてきた原住民の日本認識については，抗日事件をめぐる人々の歴史認識（末成 2011）や高砂義勇隊に参加した人々の「大和魂」・「日本精神」に関する語り（中村 2003; 山路 2004），政策と統治主体の変遷（石垣 2016）などから論じられている。また原住民族の土地権や自治権の運動に関与する若い世代が，制度や記念碑に残された「日本」の痕跡を未だ克服の対象としてみていることも指摘されている（宮岡 2016）。日常における日本認識の重要度は以前に比べ確かに低くなっているが，現代台湾における原住民族の社会的位置付けをめぐっては，日本の植民地主義の影響が完全に拭われていない。

2016 年の政権交代による台湾民主主義の定着や香港社会の変容などから，台湾と中国の政治的・経済的関係は今後も揺らぎをみせるだろう。こうした状況のなか，かつて人々の間で共有されていた日本認識は消失するのか，それとも新たなかたちで再燃するのか，本書で示された論点や視座が，現代台湾の文脈のなかでさらなる展開をみせることが今後期待される。

参考文献

蔡淑君 2020『少男少女見學中: 日本時代修學旅行開箱』國立臺灣歷史博物館 (編)，玉山社出版公司.
石垣直 2016「交錯する『植民地経験』」三尾裕子他 (編)『帝国日本の記憶』慶應義塾大学出版会.
宮岡真央子 2016「重層化する記憶の場―〈牡丹社事件〉コメモレイションの通時的考察」『文化人類学』81(2): 266–283.
中村平 2003「マラホーから頭目へ―台湾タイヤル族エヘン社の日本植民地経験」『日本台湾学会報』5: 65–86.
末成道男 2011「サイシャットから見た日本」植野弘子他 (編)『台湾における〈植民地〉経験』風響社.
山路勝彦 2004『台湾の植民地統治―“無主の野蛮人”という言説の展開』日本図書センター.